

日本精神史としての「死生観」研究序説

天沼 香

はじめに

日本人の死生観に関する研究は、日本人がそれぞれの時代に、その時代相を写し出すかたちで死生観を語ってきたにも関わらず、然程、重視されてはこなかった。

殊に、戦後においては、戦前・戦中に「死」が称揚され、強要された反動で、「死」を語ることは忌避されてきたように思われる。

加えて戦後、長らく続いた「経済」偏重の日本社会のありようのもとでの経済効率万能主義的な志向は、「死」という最も非効率な現象を直視することを回避してきた。

現実の生活の中で「死」を考えることが避けられ、あまり日常の話題にも上がらなかった風潮を反映してでもあろう、日本における死生観についての研究は活発ではなかった。

管見の限りでは、死生観の問題を率先して取り上げるべき立場にあるはずの歴史学の分野における、この問題に関する研究成果は必ずしも多いとは言えないように思われる。

こうした点に鑑て、私は、日本史上の各時代における各時代相を反映した死生観を明らかにしたいと考えている。その端緒として本稿では先づ、戦前・戦中期における日本人の死生観に焦点を当てて論を展開することしよう。

わけでも、本稿では、できうる限りにおいて、必ずしも可視性の高くない人びとの死生観を探っていくつもりである。なぜなら、これまでの数少ない他分野の死生観に関する業績をみても、それらの多くは極めて可視

性の高い立場にある日本人——すなわち時代を問わず政治・軍事・経済・社会・文化等、各方面における著名な人物たち——の死生観が描かれていることが多いからである⁽¹⁾。

これは史料上の制約によることもあろうけれども、それ以上に、庶民のそれにはあまり関心が向けられてこなかったことにもよると言わざるをえない。こうした点にこだわり、本稿では、庶民の、被支配層の人びとの死生観に迫る所存である。

1.

十五年戦争の戦時中は言うに及ばず、それ以前の時期においても大日本帝国は国家政策遂行上の必要性から、帝国臣民に対して「死」を奨励してきた。「死」を従容として受け入れることを強要してきたとすら言える。それこそが、天皇への「忠」であることを陰に陽に臣民に周知せしめたのだ。

そのため、人びとは、日常的に「死」と隣り合わせの生活を強いられていた。戦場に在る兵卒のみならず、銃後の守りを固める立場にあった人びとも、今日の生活の延長線上には「死」がある(かもしれない)ことを覚悟させられていた。

「はじめに」でも触れたように、そうした状況に対する反動も手伝ってであろう。戦後においては、長らく「死」を考えることは忌避され、良くないことのように思われてきた嫌いなしとししない。

経済効率万能主義的な思考の呪縛に陥って

いた日本人にとって、「死」について考えることなど、最も経済効率に反する思考、非効率な後向きの思考と見做されていたようにも思われる。

とともに、「老」という事態についても、「死」についてと同様、非効率的な存在、生産に関わらない余計な存在といった感じで受けとめられ、深刻に顧られることはなかった。

こうしてみると、戦後日本は、経済効率を全科玉条のようにして重視するという社会全体を挙げての傾向のなかで「老」や「死」の問題を等閑視してきたと言えよう。

しかし、20世紀末に至って、日本の経済状態は一変し、戦後、比較的長きに渡って持続した右肩上がりの経済成長はもう望むべくもなくなり、21世紀の今日も構造不況の渦中にある。

片や、少子化の進行とともに、医療技術の進歩等に伴って高齢化も進み、既に日本社会は高齢化社会から高齢社会へと移行し、近未来には超高齢社会が待ち受けている。

このような状況を踏まえて、であろう。昨今に至って、「老」や「死」は社会全体のなかで重要な意味合いを有する問題であるという認識が漸く高まってきている。

但し、「老」に関する問題は、介護問題、年金の問題、世代間格差・不公平の問題との絡みで問題視されることが多い。すなわちネガティブなニュアンスをもって語られることが多く、必ずしも高齢者にとって心地よいものではない。

しかも街のありかた（造られかた）は、若者の好みを反映したものとなり——したがって高齢者はあまり顧られず——、消費活動の主たる担い手として仮想されるのも常に若い世代で——したがって高齢者の消費関連の行動への配慮など殆ど成されず——、街、盛り場といった人間の日常生活における重要なステージから高齢者は一層、放逐されつつあるかの如くである。

「福祉」の名のもとに、老人関連施設は徐々に整備拡充されてきてはいる。しかし、それ

らとて、ともすれば体よく高齢者を社会から隔離する場として機能することにもなりかねない。現にそういう傾向は皆無とはいえず、これらの施設が、そうした隔離のための社会的装置となるなら、これは現代の姥捨て山といわざるをえない。

今日では、これらの事情を反映して、老後を海外で過ごす高齢者たちも増加の一途を辿っている。高齢者も住み慣れた日本を見限り始めたのかもしれない。

「老」の問題に少々、足を踏み入れてしまった。が、本稿は「老」がテーマではない。私は目下、上述の事柄等々と関連させながら、「老」の問題に関する別稿を用意しつつあるので、詳しくはそちらに譲る⁽²⁾ことにして、ここでは「死」に話を戻そう。

新世紀が始まって間もない頃、私は次のような文章を認めたことがある。

「前世紀末のころから日本でも再び『死』がまともに論じられるようになってきた。日常の中で、『死』が語られるようになってきた事に関しては、『死への準備教育』を唱え、『生と死を考える会』を主宰するアルフォンス・デーケンや、日野原重明らの啓蒙活動に負うところが大きい。斎藤茂太、永六輔らの「死」を扱った著作の影響も小さくない。……(中略)。

…経済が成長期から停滞期へと移行する中で、われわれ日本人の心中にも、自らの「生」や「死」の意味を問い直してみようという意識が胚胎してきたのかもしれない。

そもそも『生涯をかけて学ぶべきことは死ぬこと』（セネカ）であり、『“死への行進”』をしているのが人生』（日野原）で、『生きている目的は死ぬこと』（無着成恭）に尽き、『人は生きてきたように死ぬ』（ユング）ものだとするなら、人間たるもの誰しもが自らの十全な『生』と『死』のために思考し、自らを啓発する必要がある⁽³⁾。

そうした「死」に向けての各々の個の啓発のためにも、私は日本において未だに確立していない「死生学」を立ち上げることが急務

だと考えている。この学問は自から歴史学、文化人類学、民俗学、考古学、心理学、教育学、医学、生物学、生理学等々、文科系、理科系を超えての学際的領域を研究領域とすることとなる。

この広大無辺な学問分野を樹立するために、それこそ「まず隗より始めよ」ではないけれども、私は本稿において歴史学的視座からするところの死生観の問題に迫りたいと考えている。

2.

歴史学の視座から死生観に関してアプローチを試みようとするなら、それは精神史のジャンルに属する研究といえよう。

日本史学に限定するなら、それは日本精神史というジャンルに含まれる。けれども、このジャンルの研究は、かつて丸山真男がその慧眼で喝破したように、戦前において、日本《精神史》が、やがていつの間にか《日本精神》史に隋してしまったことに懲りて、戦後においても「あつものに懲りてなますを吹く」ような状態プラスアルファのせいで、停滞したままと言わざるをえない⁽⁴⁾。

確かに日本《精神史》が《日本精神》史となって、民族精神の鼓吹に一役買って、あの無謀な戦争に日本人を駆り立てた一因となったことを思えば、日本精神史というジャンルは再興されないほうが無難といえるかもしれない。

しかし、逆に考えれば、そうした暗い過去を有する日本精神史であるだけに、今後は時局に惑わされず、利用されず、協力もせず、純粹客観的に歴史的事実を追究する学問として再生させることが緊要とも言える。

かつて私は、こうした脈絡のなかで村岡典嗣批判を展開したことがある。以下に少々、その拙文を引用しておこう。

「思想史的な視点から『日本国民性』に関心をもった村岡典嗣は、従来みられたような『日本国民の性質中特に顕著なものを取りい

でて、列举的に明らかにしたもの』（自然心理学的研究）にとどまらず、『一層内面的にそれらの特性の根柢となり、それらの特性を維持する何等〔か〕の意味で本質〔的〕のものを闡明する事』を自らの研究の目的にしている（『日本国民性の精神史的研究』〔村岡典嗣著作輯刊行会編『国民性の研究』〕）。

そして、この内面的または本質的なものに迫るためには歴史的研究こそが必要、とする。なぜなら、個々の民族の歴史こそが、内面的または本質的なものの具体的発現すなわち具現だから、と村岡はいい、だから『我國民の諸々の特性の根柢となった本質的精神をその本拠たる歴史に於いて明らかにする』と自らの方法論を開示する……。

……私も民族性の研究の多くに欠けているのは歴史的視点であることを痛感し、自らの研究ではその視点を明確に射程に入れた研究をしたいと念じているだけに、こうした村岡の見解を首肯するものである。しかし、その彼が後段で次のように言っていることを知る時…（その発言に批判的に）こだわっておく必要を再確認せざるをえなくなる。村岡いわく、

……時恰かも現下の如き非常時局に際して、国家的戦争の勝利の為、国民士気の高揚の最大の緊急時たることは言うまでもない。幾多の言論や幾多の主張や幾多の宣伝が多くの人々によって、この目的の為に日々繰り返されている事は、何人も知る如くである。而してその為に国民の精神的特性の最も偉大なるもの、価値あるものが、日本精神の名に於いて宣揚せられている事又同様である。かくの如きは特に時局下における国民道義の振興として、その必要性なることもとより言うまでもない（同上）。

村岡はけっしてファナティックな軍国主義者でもなければ、皇国史観論者でもない。現に彼は、この引用例のような規範的 sollen の問題と、自らの追究する sein の問題を峻

別している。『現時の如き非常時局に於いて』は、『率直に我国民性や国民精神を批判する事さえ愛国的感情を害するおそれなしとしな』とし、そうしたことによってその種の研究の進展が阻害されていることを意識し、その克服の必要性まで認めている（同上）。

……（こうした）村岡ですら、先のような発言をして、実質的には戦時体制に取り込まれてしまっていた。……⁽⁵⁾。

該博な知識と、明快な学問的視座を持ち合わせて日本《精神史》に向き合っていた村岡典嗣といった学問人においても、こうした陥穽が待ち受けていたのである。いわんや凡百の学者に於いてをや、と言わざるをえまい。

私も、こうした点に十二分に留意した上で、日本《精神史》としての死生観に接近していきたいと考える。

3.

加藤周一、M.ライシュ、R. J.リフトンは、近代における日本人の死生観の研究を開始するに際して、綿密な討論のもとに6人の人物を選んだ。注(1)を見ていただければ一目瞭然だが、その6人は極めて著名な人物ばかりである。

その6人を選んだことには「さまざまな理由⁽⁶⁾」がある、としているが、その最たるものは先に私が指摘した史料上の問題であることは想像に難くない。加藤は続ける。

「具体的な表現でみずからの死について書いた人がほしかった」。そして「そのことは、われわれの選択を著しく制限することになった⁽⁷⁾」とする。言うまでもなく、そうしたことを基準に人を選べば、自ずから諸々の分野でのエリートばかりが選ばれることは目に見えていたからである。

しかし、エリート、インテリゲンチヤの日本人の死生観ばかりを並べたてて「日本人の死生観」を標榜するのは、看板に偽りありとまでは言えないまでも、部分を扱って全体を語るが如き感を大いに抱かしめる。

そうした誇りを免れるべく、加藤は前もって、6人のうちの1人、正宗白鳥の死生観について以下のように弁明する。「白鳥は、権力に反対もせず、近づこうともせず、おだやかに批判的な距離を置いて、自分の畠を耕そうとした。その意味でも、六人のなかで殊に、大多数の日本人の立場を代表している、といえるだろう⁽⁸⁾」。

しかし、これは苦しい弁解といわざるをえない。文章を書くことをもって職業とし、功なり名遂げた高名な作家の死生観をもって「大多数の日本人の立場を代表している」とはあまりにも乱暴な推論と言わざるをえない。

こうした可視性の高い日本人の死生観をもって、日本人一般の死生観を語るような愚は避けねばなるまい。当代屈指の知識人と自他共に認める加藤らしくもない誤謬といえよう。いや、逆に彼が自らもエリート、代表的インテリゲンチヤであるがゆえに犯した誤謬ともいえようか。

いくら加藤が「白鳥は、プロテスタンティズムとの特別なかわり合いを通じて、日本の大衆の現世主義を意識化したのであり、その意味でも、六人の中で大衆に一番近かった⁽⁹⁾」などと強弁してみても、白鳥と一般庶民との懸隔は大きいのである。どうしてかという問いには、ひと言「存在が意識を決定する」と答えれば十分だろう。けっして「意識が存在を決定する」わけではないのだ。

6人の中では大衆に一番近かったにせよ、尚かつ白鳥と一般庶民との隔たりは誤差の範囲などでは到底、ないと断言せざるをえない。膨大な書かれた文章を残している（残す機会に恵まれた）知的エリートと、然程多くの文章を残さない（残す機会に恵まれない）一般庶民とでは、生活感が異なり、したがって自己認識のありかた、人生観、世界観、歴史観も違って当たり前であろう。死生観とても又、然り。

そもそも人生観、死生観等々は、すぐれて個的なものであり、各個人が各々固有に抱くものであることは言を俟たない。まして個我

の明快な（あるいは明快であるはずの）エリート、インテリゲンチヤにおいては、明確にそのはずである。

とするならば、「日本人の死生観」といった、恰かも平均的日本人ないしはアイデアル・タイプとして抽出された日本人の、一般化あるいは類型化された死生観を物語るかのようなタイトルを掲げて、実は可視性の高い人物たちの死生観ばかりを語ることは、それこそ羊頭狗肉の誇りを免れまい。

といいながら、私はその抽出しにくい、各時代における平均的「日本人の死生観」を追究したいと考えている。各時代の時代相を写し出すかたちで、各々の時代を生きた名もない人びとの「生老病死」の背後に見え隠れする死生観を抽出したいと考えるのである。史料上の制約は厳然として横たわっているけれども。

例外も少なくないにせよ、近現代日本においては名もない一般庶民の人びとは、一般的には生きていくために何らかの集団に属していた。

単に所属しているだけではなく、その自らが属する集団に対して強い帰属感を持っていることが多い。集団構成員個々が、同様の帰属感を保有していることを敷衍させて考えるならば、彼らの間には共通の人生観、世界観、歴史観そして死生観が見出せるという仮説を私は立てている。

まして、日本の戦前・戦中期のように、個人の自由が抑制され、国民総動員といったかたちで全国民が戦争遂行のための体制に組み込まれるなど、全体主義的傾向が顕著だった時代にあつては、一般庶民の人びととの思考や志向は著しく同一化する傾向を示したであろうことは想像に難くない。

そんなところから私は先ず、戦前・戦中期の「日本人の死生観」を探ってみようと考えた次第である。

4.

十五年戦争末期の「死」に関する状況の酷薄さは、つとに語り継がれてきている通りである。若者の「生」が、特攻隊という「死」を余儀なくされる装置に強制的に所属させられることで断たれるという事実シンボライズされるように、国家権力によって個人の「死」が強制される時期だった。

東京音楽学校のピアニスト志望だった学生が「芸術など捨てろ、死ぬことだけを考える⁽¹⁰⁾」といった蛮声を浴びせかけられ、「死」へと追いやられていった時代だった。

その学生が、特攻隊員として出撃する前の日に、すなわち冷厳な、自らの前に横たわる「死」を前にして、もう一度、ピアノを弾きたいという気持ちに駆られる。願いは、鳥栖の小学校によって叶えられることになった。

彼は、小学生たちを前にして、自らが好きだったベートーベンの「月光の曲」を演奏し、次のような言葉を残した。

「兄ちゃんたちが死んだら、兄ちゃんたちのお父さんもお母さんも泣くだろう。でも、おまえたちが大人になるまでこの国を残すために死ぬんだからね。よい子になれよ⁽¹¹⁾」（兄ちゃんたちと複数形になっているのは、この音校の学生に協力して、ピアノ演奏をさせてくれる施設探しに奔走してくれた特攻仲間も一緒に居たから——筆者注）。

結局、音校の学生は、この演奏と言葉を最後に残して、否応なく「死」を迎え（させられ）ることになったのだった。

戦時中、明らかに児童、生徒たち向けに、彼らを一定の方向へ教導することを目的として、次のような歌が作られ、歌われていた。

今日も元気に兄さんと
揃って学校へ行けるのも
兵隊さんの御蔭です
御国の為に、御国の為に働いた
兵隊さんの御蔭です
兵隊さんよ有難う 兵隊さんよ有難う

戦さに勝つにゃお互いが
持ち場持ち場で命がけ
こんな苦勞じゃまだ足りぬ
そうだ濟まないその気持
揃う揃う気持が国守る
……

ちょうど日米が開戦するに至った頃、かの満州国で、満鉄社員の子として、日系満州人として同国撫順中学に通っていた中学生だった清水威は、この歌に関して友人が以下のような話をしたことを回想している。

「……こういう歌のとおり生きて死ぬというわけだ。これが日本人の一番幸せなんだとよ⁽¹²⁾」。

こう言った木村某という清水の頭の良い友人は、「御国のために、御国の為に働いた兵隊さんの御蔭です」云々という歌詞のうちに「兵隊さんの死」を、そして近未来における「自らの死」(の強制)をも読み取っていたのだろう。

シニカルとも、批判的とも、諦観が潜んでいるとも受け取れる木村の言葉は、当時の中学生たちが否応なく抱かされた死生観のひとつの典型を示しているように思われる。

中学生の時期にこうした死生観のような考えを身に付けさせられれば、旧制高校生、大学生等になって学徒兵として召集されても割合に違和感なく自らを死地に追い込む装置に所属せしめることができたのかもしれない。

戦中派を自認する吉田満は語る。「われわれ世代の最も本質的な属性は、いうまでもなく、みずから戦場におもむいて生命を戦闘体験に賭けることであった。原則として同じ年代に属するすべての健康な青年が、(理工科系の学生その他一部の例外を除いて)ひとしく戦争参加を余儀なくされたのは、われわれの世代だけであった。

われわれ世代は、自己の肉体が戦場に召される時、それを命ずる権力に抵抗することを放棄した。……(中略)……

われわれを戦地に駆り出そうとする暴力に

対して、われわれが苦しみながらもそれを受入れたのは、歴史の流れがすでに逆戻りを許さぬ深さまで傾いていることを知ったからである。……

戦前派の世代は、今に至るまで様々に釈明を試みているけれども、結局は彼らの責任において、日本は果てしない長期戦の方向に決定づけられた。しかし戦火に身をさらしたのは、彼らではなく、われわれの世代であった。……(中略)……

そのために死の代償まで求められたわれわれが、こうした命題の究明に真剣でなかったはずはない。……(中略)……

『日本人とは、何ものか。どこに行こうとするか』こうした設問と真っ向から取組みながら、われわれは次第に戦局の核心に追いつめられていった。……われわれ自身にはこの設問の解明に参画する権利はなく、許されていたのは戦争のために死ぬことだけであり、戦争のために死ぬことを通して、そのようにわれわれを殺すものの実体を探り当てただけであった。

……われわれ世代の使命は、絶えず死の危険に身をさらしながら、世代としての生甲斐を賭けて、日本の目指すべき方向を暗示することにある。日本人を支える拠りどころを模索しながら、その過程で戦争に斃れることにある⁽¹³⁾」。

こうした内田の口勿からは、明らさまな戦前派の人びとに対する不信感、恨みの感情さらには敵愾心すら読み取れる。自分たちは、日本をとんでもない方向へ向わせておきながら、それに対して明確な責任を取ろうともせず、内田たち戦中派世代の人びとを、ほぼ無条件に全体的に自ら死を予期できる役回りへと追い込んだことに対する恨みの念は極めて深い。

ただ、もちろん内田の発言はそんな皮相的なものに終るのではない。恨みを語りながら、そうした状況に陥らされた自分(たちの世代)が成すことができることを認識し、そこに自ずと人生感や死生観をも滲ませる。

自分たちを戦争へと駆り立てる者たちに対して明確な反抗をすることもなく（ごく少数、そうした人たちもいたけれども）、結果として戦争に加担し、「その過程で戦争に斃れること」こそ自分たちの使命と感じていた（あるいは、感じさせられていた）という感覚は、明らかに先の中学生木村某の「……こういう歌のとおり生きて死ぬというわけだ。これが日本人の一番幸せ……」との思い（あるいは、思いこまされ）の延長線上にある。

十五年戦争時、わけても日米開戦後、戦況が思わしくなくなるにつれ、青少年たちには勇ましく「お国の為に死ぬこと」が美化されて吹聴、鼓吹されていった。

そうした中で、勇ましい掛け声とは裏腹に、戦争に駆り出される当事者たる青少年の心中には「密やかなる諦観」が形成されていったであろうことが、これまで述べてきた清水、木村、内田の発言から汲み取ることができる。

言うまでもなく、彼らの考えから帰納的に全ての青少年がそうだったなどと強弁するつもりはない。ただ、青少年のうちの少なくともそれほど少なくはない部分——日本、日本人、歴史、「生」、「死」等を真剣に考えていた（あるいは考えざるをえないところに追い込まれていた）青少年たち——は、こうした自らの内に秘めた「密やかなる諦観」を抱くに至った（あるいは、抱かざるをえなくされた）ことは歴史的事実として、後代のわれわれ日本人が明確に認識しておいて然るべきことといえよう。

内田満といえば、1923年の生まれで、東京帝国大学法科の学生の時に学徒兵として、死を予期させられるかたちで入隊させられた人物である。

同じ頃、学徒出陣で帝国陸海軍に入隊させられた数多くの同年輩の有為の人物たちが「散華」を余儀なくされていったなかで、内田は1945年、太平洋戦争最末期に自暴自棄的な特攻作戦に否応なく参画させられ、あの戦艦大和乗組員として集中砲火を浴びながら、九死に一生を得、戦後を生き延び、1979年に

亡くなった。

典型的な戦中派の生き残りといえよう。そのこと自体を、彼自身も自らのアイデンティティとして強く意識していた。であるからこそ、戦中派の無念の死を余儀なくされた仲間たちになり代って、彼は日銀マンでありながら、執筆活動にも力を傾注し、「戦中派」を語り続けてきた。

そうした彼の文章の行間に、予期される死に対する「密やかなる諦観」を見てとることは、然程、難解なことではない。そして、その見解をあの十五年戦争当時の時代相と重ね合わせるとき、彼の「密やかなる諦観」は、より広範なその頃の青年たちの死生観の重要な部分を形成していた、というように敷衍させて考えることができるように思われるのである。

もとより、本節の『『密やかなる諦観』的 死生観』論は、私としては歴史的事実として認識しうるものであり、また認識すべきものと考えているけれども、まだ現段階では仮説に過ぎないことは言うまでもあるまい。

仮説としての、戦中期における青年たちの死生観の中核をなす思考としての「密やかなる諦観」に関して、次稿以降で、暫くの間、実証的な調査研究を続行していきたいと考える。

5.

時代の如何を問わず、また洋の東西を問わず、青年の死生観には何ほどか「ヒロイズム (heroism)」が宿っていることが少なくない。取り立てて英雄的な死を待望するわけでもなければ、まして一死をもってヒーローとなることを夢想するといった類の他愛ない思考でもない。そうではなくて、死を敢行すること自体に対するヒロイックな思考といえようか。

近代日本にそれを当てはめてみれば、人生は「不可解」と断じて、ないしは嘆じて、華巖の滝に身を投じて果てた藤村操の死に方などにその典型を見出すことができよう。

青年という範疇からは少しく外れるかもしれないが、東京、市ヶ谷の自衛隊の建物のバルコニーから櫓をとばして後、森田必勝に介錯させて割腹自殺を遂げた三島由紀夫の死に方なども、この系譜に属する。三島が自らの死に先立って、新左翼陣営に対して「死」を促していたことなどにも、三島の死の敢行そのものに“ヒロイック”という意味においての価値を置いていた三島の死生観の一端を垣間見ることができる。

しかし、自らの自由意志によって自死を敢行した藤村や三島とは異なり、戦時中の青年たちは、自ら死を選ぼうとしていたのではなく、国家権力によって強制的に死地に赴くことを余儀なくされた人たちだった。自らの意志とは全く関わりのないところで決定された路線のままに、自らの生死が翻弄されたのだ。

しかし、そうした青年たち——例えば学徒兵といった立場に立たされた人たち——のなかにも、他の時代の青年にみられるような「死に対するヒロイズム」を包含する死生観が宿っていた。

逆に権力の側からみるなら、大日本帝国は、すなわち当時の国家権力は、上のような青年たちの死生観を巧みに国家政策、世界戦略のなかに組み入れて、彼らを従順に自らの暴力装置のなかに取り込み、死地に赴かしめることに成功した、といえよう。

彼らの「死」に関するヒロイックな思考を十二分に利用して、国家のために「散華」することを美化し、彼等をして自らの死を納得せしめたのだ。

彼らのほうも、国家権力によって前途有為な自らの命を断たれることについて、何ほどか主体的な意義付けをしないことには、死んでも死にきれなかったであろうし、「密やかなる諦観」を自らの内に形成することも困難だったに違いない。

それをも見越して、国家権力は散りゆく命を賛美して止まなかった。そして「死」を奨励し、強要していったのである。

こうした青年たちの「死」に対するヒロイッ

クな思考そして志向に加えて、国家権力が青年たちを死へと導くのにとって都合良かったのは、日本人が歴史のなかで培ってきた「死生観」だった、と私は考えている。

その最たるものは所謂、仏教的無常観といえよう。仏教的素養に裏打ちされた無常観は、吉田兼好の「人はただ、無常の身に迫りぬる事を心にひしとかけて、つかの間も忘るまじきなり」⁽¹⁴⁾といった叙述に明確に見出すことができる。そこには、「密やかなる諦観」どころか、「顕著なる諦観」が現れている。

「……人死をにくまば、生を愛すべし。存命の喜、日々にたのしまざらんや。おろかなる人、此の楽をわすれて、いたづがはしく外のたのしびをもとめ……。いける間の生をたのしまずして、死に臨みて死をおそれば、此の理あるべからず。人皆生をたのしまざるは、死をおそれざる故なり。死をおそれざるにはあらず、死の近き事をわするゝなり。……」⁽¹⁵⁾。

「……とほく日月を惜しむべからず、たゞ今の一念、むなしく過ぐる事ををしむべし。もし人來りて、我が命、あすは必ず失はるべしと告げしらせたらんに、けふのくるゝあひだ、何事をかたのみ、何事をかいたなまん。我等がいけるけふの日、なんぞ其の時節にことならん……」⁽¹⁶⁾。

「四季はなほ定まれるついであり。死期はついでをまたず。死は前よりしもきたらず。かねてうしろにせまれり。人皆死ある事を知りて、まつことしかも急ならざるに、覚えずして來る。おきのひがた遙なれども、磯よりしほのみつるが如し」⁽¹⁷⁾。

こうした兼好一流の表現は別としても、このような死生観は日本人の少なからぬ知識層の心性のなかに時代を越えて脈々と受け継がれていった。しかし、さすがに何れの時代にあっても、若年層の多数の諦観は「顕著なる諦観」となることは多くはなく、「密やかなる諦観」止まりのことが多かった。青年たちは、少なくとも自らの肉体に関しては、まだ「死」からは遠いところにあったからである。

このあたりに関して詳しくは、別稿で実証

的に論じていくこととしよう。

もうひとつ、近代日本の国家権力が青年たちを死へと導くに際して好都合だった、日本人が歴史的に培ってきた死生観は、「滅びの美学」とでも言うべき思考そして志向の系譜である。

古代のいずれかの時期に、日本人が注釈を付けずに「花」という時、それ以前は「梅」を指していたのが、「桜」に取って代わられたことは周知の事実である。

その国家の、そして国民の「花」になった「桜」の美は散りぎわにあることも又、周知の通りだ。ぱっと咲いて、ぱっと散る、そのいさぎよさ、はかなさは、日本人の精神に強く訴える何ものかを持っていた。爾来、各時代の文芸作品に「桜」の登場しないことはないほどになった。

こうして、この「桜」にシンボライズされたいさぎよさ、はかなさは、深く日本人の心中に刻み込まれていただけに、国家権力は日本人を死に導くときに、この「桜」の「滅びの美学」を十二分に利用したのである。

「貴様と俺とは同期の桜 同じ航空隊の庭に咲く 咲いた花なら 散るのは覚悟 見事散ります国の為」

「若い血潮の予科練の七つボタンは桜に鐘」云々と「桜」は軍歌に、若者を死へ向けて鼓舞する歌に、と活用されたのだ。

こうした「桜」にちなむ「滅びの美学」の他にも、日本には「滅びゆくもの」「滅び去りしもの」への愛惜の系譜がある。日本人のうちに潜む頼朝を嫌い、義経に同情する、高師直を嫌い、塩冶判官に同情するといった諸謂「判官びいき」の心性も、この系譜に属するといえよう。

近藤勇、土方歳三、沖田総司、芹沢鴨らを擁し、幕末に反動の実働部隊として血に染まった活動を展開した新選組が〈その存在の意味合いの歴史的位相は別として〉、今日に至るまで人気絶えないのも、「義」や「君恩」に殉じたとされる彼らの意識や行動から湧出する「滅びの美学」が、日本人の心の琴線に

触れるからに他ならない。

多摩の農民の子に生まれながら、最後には若年寄にまで駆け上った新選組局長、近藤勇の辞世の歌など、まさに滅びゆく自らへの賛歌といえよう。

孤軍 援け絶えて俘囚となり
君恩を顧念して 涙 更流る
一片の丹裏 よく節に殉じ
……

義を取り生を捨つるは わが尊ぶところ
快く受く 電光三尺の剣
ただ まさに一死をもって君恩に報いむ⁽¹⁸⁾

この近藤とほぼ同時代を生きた吉田松陰なども、こういう行動を取れば、自らの命に関わる結果が待ち受けているといったことを明確に認識しながら、敢えて自らの信念に従って行動をして果てた。

かくすれば かくなるものと知りながら
やむにやまれぬ 大和魂

身はたとひ 武蔵の野辺に朽ちぬとも
留め置かまし 大和魂

こうした松陰の辞世等の歌にも、はっきりとした「滅びの美学」が宿っている。そこには「死」に対するヒロイズムも垣間見ることができる。そしてこの松陰の「大和魂」をシンボリックに表徴するのが「桜」なのである。これは、次のような本居宣長の歌を提示すれば証明される。

敷島の大和ごころを人間はば
朝日に勾ふ 山桜花

このように、「大和魂」そして「大和ごころ」(=日本人の精神の心髄といったようなもの)は、日本の国花「桜」(の散りぎわのよさ)と結びつけられて、一層、美化されていった。その真骨頂が「滅びの美学」だった

といえよう。

この「滅びの美学」の系譜についても、次稿以降で詳細に検討していきたいと考えている。

おわりに＝これからの本格的研究に向けて
死生観とは何か。広辞苑は簡単に「死と生についての考え方。生き方・死に方についての考え方」と規定する。日本国語大辞典は「生きることと死ぬることについて、判断が行為の指針となるべき考え方。生と死に対する見方」としている。

人生観が、人間の一生の価値や目的そして意味等についての考え、見方といったものであるとするなら、死生観は当然のことながら、「死」の方に重点を置きつつ、人生の意味を問う、「死」や「生」に関する見解といえよう。

それは、人生観同様、すぐれて個々の個に帰属するものであり、基本的には軽々に類型化など成しうるものではない。

けれども、個々の人間は、それぞれがそれぞれに時代の子であり、その時代の空気を吸って、その時代相に染まりながら生を営んでいる。そうしたなかで発酵してくる個々の思考・見解等——なかんずく、ここでは死生観——は、自ら独自のものを持ち合わせながらも、自ずからその時代相を反映したものとなる。この辺りに、死生観の個別性を越えたところでの共通性を把握しうる論拠が見出せるのである。

したがって、死生観を個別性を越えたところで、共通性をもって認識することを可能にするひとつの要素は時代相といえよう。さらには、民族性なども又、別のひとつの要素と考えられるだろう。

通時的に見た場合の時代相、共時的に見た場合の民族性などが、本来ならば極めて個別的な死生観を、典型的に捉えることを可能にする要因といえるのである。

したがって、次稿以降で、拙論を展開していくに際しては、個々の可視性の高い人物の

死生観を軽視するわけではけっしてないけれども、そうした人物の個別的な死生観も出来る限りにおいて、時代相のなかで〈恣意的にではなく〉解釈し直して、あくまでその人物に密着した固有の見解と、類型化する部分とに分けて、もって後者を重視して、「その時代特有にして、その時代に一般的な死生観」のようなものを見出していきたいと考えている。

〔注〕

- (1) たとえば、加藤周一、M.ライシュ、R. J. リフトン著（矢島翠訳）の『日本人の死生観』上・下（いずれも1977年、岩波書店刊）が扱っているのは、乃木希典、森鷗外、中江兆民、河上肇、正宗白鳥、三島由紀夫らの死生観である。何れも高名な極めて可視性の高い軍人、作家、思想家、学者であることは言うまでもあるまい。もう一つ例を挙げておこう。説話文学の研究者、志村有弘の手になる、奇しくも上記と同タイトル『日本人の死生観』（1998年、ニュートンプレス刊）が扱うのは、教信上人、藤原道長、平清盛、今井四朗兼平、平知盛、源義経、鴨長明、浅井長政、織田信長、柴田勝家、佐久間盛政、月羽長秀等々、これまた位人臣を極めた人物、名だたる武将等の死生観である。
- (2) 天沼香「敬老のすすめ」（岐阜新聞、2002年9月8日付朝刊、サンデーコラム欄）で提示したような歴史的視座および現実的な視点を基盤において、別稿を準備中である。
- (3) 天沼香「死生観の歴史人類学～『生』のため『死』の熟慮を～」、岐阜新聞、2001年5月6日付朝刊、サンデーコラム欄。
- (4) 丸山貞男『日本の思想』、1961年、岩波書店、3ページ。
- (5) 天沼香『「頑張り」の構造——日本人の行動原理——』、1987年、吉川弘文館、12～14ページ。
- (6) 加藤等前掲『日本人の死生観』、はじめに、4ページ。
- (7) 同上。
- (8) 同上、5ページ。
- (9) 同上。
- (10) 毛利恒之『日光の夏』、1995年、講談社。この書は、ドキュメンタリー・ノベルと著者が述べているように、記録文学である。したがって、全てが歴史的事実ではないけれども、根幹の叙述は、史実に基いているという意味において、史料として活用しうる部分を有する書物といえ

- よう。
- (11) 同上。
 - (12) 清水威「生いたちの記（三）撫順中学校の毎日」（『中央線』第五十九号、2002年9月、中央線社刊）
 - (13) 内田満「死者の身代わりの世代」（初出は『諸君！』1979年11月号後、内田『戦中派の死生観』、1980年、文藝春秋。後、同書の文春文庫版、1984年、所収。118-119ページ。）
 - (14) 吉田兼好『徒然草』（西尾実校訂）、1928年、岩波書店
 - (15) 同上、第九十三段、68ページ。
 - (16) 同上、第百八段、76ページ。
 - (17) 同上、第百五十五段、105ページ。
 - (18) 近藤勇「孤軍 援け絶えて」（中西進『辞世のことば』、1986年、中央公論社、23ページ）。

《付記》

本稿の初校を受け取った奇しくもその日、恩師、家永三郎先生の訃報に接した。先生の

学恩は、私の表現力では到底、言い尽くせるものではない。本稿のようなテーマを考究しようと思いついた背景にも、思えば師の姿がある。

先生は、戦争体験の風化、さらには戦争という醜い史実すら風化しつつあるような状況を憂えておられた。先生の薫陶を深く受けた私としては、師のこうした憂いに少しでも応えるべく、一層、奮励努力して、民衆の立場からの日本近現代史研究並びに心温かい教育に勤しんで行きたいと思う。

感傷がましいことを言うのは師の遺志に反することは重々承知しながらも哀惜の念を禁じ得ない。

この場をお借りして、我が学問の師にして人生の師でもあった家永三郎先生のご逝去に対し、深甚なる哀悼の意を表する次第である。